『とはずがたり』における名詞「すゑ（末）」の意味・用法
――『蜻蛉日記』との比較から――

森（もり）　あかね（あかね）

同志社大学大学院博士後期課程

キーワード

末，すゑ，意味・用法，とはずがたり，蜻蛉日記

要旨

『とはずがたり』における「すゑ（末）」３４例と「末」を含む複合語について、意味・用法ごとに分類、記述を行い、意味・用法ごとの用例数を示すことを目的とする。その際、『蜻蛉日記』における「すゑ（末）」６例と「すゑ（末）」を含む複合語も同様の作業を行い、比較する。『とはずがたり』は『蜻蛉日記』よりも多義的に「すゑ（末）」は使用され、「すゑ（末）」の対象が拡大され、意味が分化していく過程を推測できる。

１　はじめに

本稿は、鎌倉時代成立の『とはずがたり』（後深草院二条作）における名詞「すゑ（末）」の意味・用法を記述し、意味・用法別の用例数を示すことを目的とする。その際に、同じ女流日記文学作品である平安時代成立の『蜻蛉日記』（藤原道綱母作）も同様の調査を行い、相違点を参考にしながら、考察を進めたい。

２　研究方法

『とはずがたり』『蜻蛉日記』に用いられている「末」「すゑ」の用例を全て抜きだし、意味を記述し分類する。なお、本稿で用いるテキストは久保田淳校注・訳『新編日本古典文学全集４７　建礼門院右京大夫　とはずがたり』(1999 年　小学館)、菊池靖彦・木村正中・伊牟田経久校注・訳『新編日本古典文学全集１３　土佐日記　蜻蛉日記』(1995 年小学館）である。引用後の数字は（巻、頁数、行数）を示している。例えばⅠ203.06.011 は巻１、６頁、１１行目ということである。本稿では「末」「すゑ」を含む複合語も調査対象とし、同様に意味記述を行う。

３　「すゑ（末）」の用例数

『とはずがたり』の「すゑ（末）」の用例数は３４例であり、「末」を含む複合語は「行く末」２１例、「末つ方」４例、「末葉」３例、「末の代」１例、「葉末」１例となっている。一方、『蜻蛉日記』の「すゑ（末）」の用例数は６例、「行く末」６例である。二つの

作品における延べ語数は異なるものの（『とはずがたり』31,335 語 、『蜻蛉日記』22,400 語）[注1]、単純に比較すると『とはずがたり』における「末」の用例数は、『蜻蛉日記』における「末」の用例数の約５．６倍となり、「末」を含む複合語も『とはずがたり』に種類・用例数ともに多く見られる。

４　『とはずがたり』における「末」

『とはずがたり』における「すゑ（末）」３４例を分類して、意味記述を行うと以下のような結果となった。

①［(物の）末端　端］

これは根元に対する先、物体や場所の端など空間的な意味・用法としての「末」の例を指す。これは全１１例であり、全体の 32.4%を占めている。

（１）　今よりや思ひ消えなむひとかたに煙の**末**のなびきはてなば（Ⅰ203.06.011）

（２）夜離れなく見たてまつるにも、「煙の**末**、いかが」と、（Ⅰ208.09.009）

（３）東の御方と二人、**末**の一間にて、何となき物語して、（Ⅱ285.01.054）

（４）　契りこそさても絶えけめ涙川心の**末**はいつも乾かじ（Ⅲ362.12.014）

（５）　思ひ消えむ煙の**末**をそれとだに長らへばこそ跡をだに見め（Ⅲ388.10.044）

（６）　思ひ立つ心は何の色ぞとも富士の煙の**末**ぞゆかしき（Ⅳ426.15.077）

（７）雪さへかき暗し降り積もれば、ながめの**末**さへ道絶え果つる心地して、（Ⅳ446.03.005）

（８）待つとてもまた憂き思ひの慰むにもあらず、越え行く山の**末**にも逢坂もなし」など思ひつづけて、（Ⅳ474.01.041）

（９）　する墨は涙の海に入りぬとも流れむ**末**に逢ふ瀬あらせよ（Ⅴ519.01.104）

（１０）事果てて空しき煙の**末**ばかりを見まゐらせし心の中、今まで世に長らふべしとや思ひけむ。（Ⅴ508.07.017）

（１１）白き箸のやうに元は白々と削りて、**末には**椰の葉二つづつある枝を二つ取り揃へて賜はると思ひて（Ⅴ523.10.161）

実際に目の前に存在する物体の端を指して使われるのは、（１１）の枝の先を示す「末」の例のみとなっている。全体として和歌的表現として使用される例が多い。頻出するのは（１）（２）（５）（６）（１０）に見られる「煙の末」という例である。（２）は（１）の和歌を踏まえた表現であるが、煙の先という、今まさに消えていく頼りないものの例えとして繰り返し使われている。（７）の「ながめの末」は「眺望する先の方」「京極派の和歌に作例が見える和歌的表現」と新編全集の頭注（４４６頁　二）が指摘している[注2]。（９）も和歌の中での例である。自分が涙の海に入り流れていく先、と海の先にあるものとして瀬を設定しており、空間的な端として分類できるだろう。問題となるのは（４）の例である。「心の末」という表現は難解である。続く③にも「心の末」という表現は見られるが、この場

合は「いつも乾かじ」と続く表現、また直前の「涙川」から、涙川が心の「末」に流れているので乾くことがない、という癒えることのない悲しみを詠んだ歌と言えよう。つまり、心という空間の端に涙川が存在している、と解釈でき、それを踏まえるとこれもまた空間的な意味として分類が可能であろう。

②[子孫　跡継ぎ]

これは血筋の末、つまり子孫を指す意味としての「末」の例を指す。これは全部で２例見られ、全体の 5.9%である。

（１２）我も我もと申し候へども、花山・閑院、ともに淡海公の**末**より、次々また申すに及ばず候ふ。（Ⅰ276.14.095）

（１３）　　思ひ出づるかひこそなけれ石清水同じ流れの**末**もなき身は（Ⅳ435.13.018）

（１２）は東二条院に対する後深草院の取りなしの手紙の中での例である。花山院家、閑院家が淡海公（藤原不比等）の子孫から続くことを示す。（１３）は和歌での例である。石清水八幡宮の流れの「末」とは、石清水八幡宮が清和天皇によって創建され、清和源氏の氏神として尊ばれたことを踏まえ、源氏の流れをくむ子孫を意味している。

③[将来　未来]

時間的な「末」の意味・用法と言える。その中でもこの例は長期的な時間の中で見た際の先を示すもの、つまり将来や未来を指す意味での「末」の例を指す。これは全部で４例見られ、全体の 11.8%である。

（１４）　　「よそながら馴れてはよしやさ夜衣いとど袂の朽ちもこそすれ　思ふ心の**末**空しからずは」など書きて返しぬ。（Ⅰ196.16.017）

（１５）　　契りおきし心の**末**の変らずはひとり片敷け夜半の狭衣（Ⅰ197.04.025）

（１６）「恨みは**末**も」とて、絶えず言問ふ人にてはありける。（Ⅲ397.11.029）

（１７）花咲きたるを見るにも、心の**末**は空しからじと、頼もしきに、（Ⅲ405.03.008）

４例中、「心の末」が３例を占めている。（１４）は二条が雪の曙からの恋文と贈物に対する返事である。歌に続けた一文に「末」は使用される。二条はこの返事とともに贈物を返す。雪の曙が自身を思う気持ちが将来まで続くか分からない頼りないものなので、贈物を受け取れないという思い故の行動である。（１５）はそれに対する雪の曙の返歌である。雪の曙は再び先ほどの贈物を添え、二条の言葉を踏まえつつ、愛情を約束した自分の心は変わらないので、貴方の心が変わらないのならばこの衣装を着て欲しいと、「心の末」を二条の心の問題に切り返し使用する。（１７）は神恩への願いを込め、自身の将来の心は頼りないことはあるまいという二条の思いの中の例である。「心の末」はいずれも、人間の心は揺れ動く不安定なものであるということを前提としていることがわかる。（１６）の「恨みの末」もいくら恨めしいと思ってもいつまでも恨めしいと思う事はできないという「思ひかねなほ恋路にぞ帰りぬる恨みは末も通らざりけり」（千載・恋四）[注3]の古歌を引いての例

で、同様の前提があると見てよいだろう。いずれの例も具体的な到達地点が想定されているわけではなく、現在の時間と比較して変化が予想される将来、未来として認識されている。

④[（季節や月の）終りごろ　末期]

これも時間的な「末」の意味・用法であるが、季節や月といった決まった時間の単位の中での端、その時間単位の終わりの頃合いを示す例である。全部で１１例見られ、全体の32.4%に当たる。

（１８）正月の**末**になりぬれば、「かなふまじき御さまなり」とて、嵯峨御幸なる。（Ⅰ214.09.010）

（１９）七月も**末**になるに、二十七日の夜にや、常よりも御人少なにてありしに、（Ⅰ222.04.038）

（２０）六趣を出づる身ともがなとのみおぼえて、またこの月の**末**には出ではべりぬ。（Ⅰ245.08.061）

（２１）誰が咎とか言はむと思ひつづけられてあるほどに、二月の**末**よりは御所ざまへも参り通ひしかば、（Ⅰ255.04.012）

（２２）かかるほどに、神無月の**末**になれば、常よりも心地も悩ましくわづらはしければ、（Ⅲ381.08.004）

（２３）明かし暮して年の**末**にもなれば、送り迎ふる営みも何のいさみにすべきにしあらねば、（Ⅲ402.07.037）

（２４）またの年の睦月の**末**に、大宮院より文あり。（Ⅲ405.08.004）

（２５）十月の**末**にや、都にちと立ち帰りたるも、なかなかむつかしければ、（Ⅳ453.13.002）

（２６）長月の**末**のことなれば、虫の音も弱り果てて、何を伴ふべしともおぼえず。（Ⅴ492.08.028）

（２７）とかくするほどに、霜月の**末**になりにけり。（Ⅴ493.11.005）

（２８）如月の**末**にもなりぬれば、このほどと思ひ立つよし聞きて、（Ⅴ497.10.018）

この意味・用法の例は（１８）の「正月の末」や、（１９）の「七月の末」のように特定の月や期間を示す語に続く形で使用される。その示された特定の期間を、一つの単位に換算して見た際の「末」を示している。

⑤[晩年　盛りを過ぎた時期　衰退期]

これは生命の命など決められた時間に対して、終焉に近い期間を指す「末」の例である。④における一定時間の末期から更に進み、具体的な意味合いを付していることが読み取れる例である。この例は１例のみで、全体の2.9%である。

（２９）「浅茅が**末**にまどふささがに」と書きたる硯の蓋に、（Ⅱ306.16.013）

参上を申しつけられたものの、忘れられてしまった女の後深草院の手紙に対する反応が語

られる場面である。新編全集頭注（３０６頁　六）では、「風吹けばまづぞみだるる色かはる浅茅が露にかかるささがに」(『源氏物語』「賢木」１１８頁）[注4]を引歌として指摘する。ここで主眼となっているのは変わってしまった後深草院の愛情であり、それを「浅茅が末」とし、「ささがに」は振り回される女を暗示している。単なる浅茅の葉末から進んで、盛りが過ぎた時期の浅茅と限定してもよいのではないだろうか。①の意味との掛詞とも捉えられるが、主眼となる意味はこちらであると思われるため、ここに分類する。

⑥[結果　結末]

これも時間的「末」の意味・用法であるが、時間の単なる延長上としてではなく、何かの出来事が関わりたどり着く未来としての「末」の例を指す。③の［将来　未来］に、因果関係の意味合いが付加され、ある到達する一定の時間の地点が設定されているものである。この例は４例で、全体の 11.8%を占める。

（３０）　　榕摘む暁起きに袖濡れて見果てぬ夢の**末**ぞゆかしき（Ⅱ298.05.021）

（３１）逃るることなければ、四方の社にかけぬるも、四方の社にかけぬるも、誓ひの**末**恐ろしき心地して、(Ⅱ343.10.048)

（３２）情けなく申したりけるも、御恨みの**末**も、かへすがへすよしなかるべし。(Ⅲ354.06.081)

（３３）恋路の**末**にはなほ関守も許しがたき世なれば、よしやなかなかと思ひ返して、(Ⅳ451.03.015)

（３０）は有明の月が、二条の書き残した「夢」という文字に対し送った榕の枝に書かれた歌である。見果てぬ夢の「末」、つまりは有明の月と二条との恋の結末が知りたいという心情を籠める。(３１）は四方の神社への誓いを破った際に起こり得る結果への恐れの心情であり、(３２）は二条が有明の月との関係を告白した後の後深草院の言葉で、つれない二条を有明の月が恨んだ結果、よくないことになるだろうと語る。(３３）は二条が陸奥まで行きたいとは願うものの、恋の結末は関守も通すことは難しいのだから、と引き返すことを決める場面である。(３０）同様に恋が迎える結末として解釈してよいだろう。③が現在に対する相対的な「末」であったのに対し、こちらの場合はどの例も現在起こっている状況がどのような結果を迎えるのかが話題となっており、未来の一定の到達地点が想定されているのが特徴となっている。

⑦[末席　下位　下座]

これは席や位の「末」、末席、下位を表す例である。１例のみで、全体の 2.9%である。

（３４）　　おしなべて塵に交はる末とてや苔の袂に情けかくらむ（Ⅳ466.08.039）

旅の途中で道を案内した度会常良に対する二条の贈答歌である。自身が尼であることを謙り、世間に生きる人々の末席に連なる身と表現する。

その他、「末」を含む複合語、その意味の分類は以下のとおりである。
○すゑのよ（末の代　名詞）
[仏法が衰えた末法の世]
（３５）我濁世、**末の代**に生れたるは悲しみなりといへども、かたじけなく后妃の位に備はりて、(Ⅲ375.16.067)

○すゑつかた〈末つ方　名詞〉全４例。
[（季節や月の）終りごろ　末期]
（３６）さるほどに、二月の**末つ方**より心地例ならずおぼえて、(Ⅰ254.10.004)
（３７）二七日の**末つ方**よりよろしくなりたまひて、(Ⅱ300.14.027)
（３８）卯月の**末つ方**のことなるに、なべて青みわたる梢の中に、遅き桜のことさらけぢめ見えて、(Ⅱ326.08.002)
（３９）卯月の**末つ方**より大事に病み出だして、(Ⅳ434.08.045)
「末」の④と同様の意味であるが、「方」という方向、向きを意味する語が入ることにより、その時期の「末」を始点とする先のことを語る際に使用されている。（３６）（３７）（３９）は病気の容体がその「末つ方」より変化していく様を示している。（３８）は新緑の中の遅桜の描写であり、「末」より先の時期と示すことにより夏へ向かう季節に取り残された桜を焦点化している。

○すゑば〈末葉　名詞〉全３例。
[草や木の先の方の葉]　１例
（４０）　影宿す山田の杉の**末葉**さへ人をも分かぬ誓ひとを知れ（Ⅳ466.12.011）
[子孫　末裔]　２例
（４１）奈良の方は藤の**末葉**にあらねばとて、いたく参らざりしかども、(Ⅳ453.15.011)
（４２）　契りありて竹の**末葉**にかけし名の空しき節にさて残れとや（Ⅴ517.10.023）
２例見られる［子孫　末裔］の意味は「末」の②の意味から派生した和歌的な表現となっている。（４１）の藤の末葉は藤原氏の子孫を示し、（４２）の竹の末葉は新王家の子孫を示している。

○はずゑ　〈葉末　名詞〉　全１例
[葉の末端]
（４３）更けゆくままに澄み昇り、**葉末**に結ぶ白露は玉かと見ゆる心地して、(Ⅳ449.06.008)

○ゆくすゑ〈行く末　名詞〉　全２１例
[進んでいく先　進んでいく方向]１例。

（４４）はるばる一通りは、来し方**行く末**、野原なり。(Ⅳ448.14.062)
［これから先　将来　前途］　２０例。
（４５）昨日の雪も今日よりは跡踏みつけむ、**行く末**」など書きて（Ⅰ196.06.012）
（４６）この身の事の**行く末**の見たさにこそとおぼえしさま、罪深くこそおぼえはべれ。（Ⅰ221.11.088）
（４７）　　別れても三代の契りのありと聞けばなほ**行く末**を頼むばかりぞ（Ⅰ225.08.036）
（４８）念仏のままにて終らましかば、**行く末**も頼もしかるべきに、（Ⅰ229.13.005）
（４９）いかにもはかばかしからじとおぼゆる**行く末**も推しはかられて、（Ⅰ239.04.017）
（５０）過ぎにし方も**行く末**も、またあるべしともおぼえでよ。（Ⅰ243.09.053）
（５１）わが過ちの**行く末**いかがならむと、（Ⅰ252.02.043）
（５２）違ひざまも**行く末**いとあさましきに、（Ⅰ255.06.024）
（５３）つひに漏りやせむと、**行く末**いと恐ろしながら、（Ⅰ257.04.015）
（５４）身の過ちの**行く末**、はかばかしからじと思ひもあへず、（Ⅰ260.08.016）
（５５）「浅くなりゆく契り知らるる今宵の蘆分け、**行く末**知られて、心憂くこそ」とて、(Ⅲ362.07.036)
（５６）つひにはかばかしかるまじき身の**行く末**をなど、(Ⅲ369.04.047)
（５７）さても、二葉なるみどり子の**行く末**を、(Ⅲ398.05.019)
（５８）　　**行く末**をなほ長き世とよするかな弥生にうつる今日の春日に（Ⅲ415.05.006）
（５９）　　**行く末**遠き君が御代とて（Ⅲ420.12.009）
（６０）　　心の内は、来し方**行く末**のことも、(Ⅳ461.01.048)
（６１）　　あり果てむ身の**行く末**のしるべせよ憂き世の中を度会の宮（Ⅳ473.01.023）
（６２）　　**行く末**も久しかるべき君が代にまた帰り来む長月のころ（Ⅳ473.06.019）
（６３）いまだ四十にだに満ちはべらねば、**行く末**は知りはべらず、(Ⅳ480.12.006)
（６４）さても宿願の**行く末**いかがなりゆかむとおぼつかなく、(Ⅴ533.06.030)

「行く（動詞)」＋「末（名詞)」の繋がりとしても処理できるが、用例数の多さに加えて１例を除き他２０例は全て、将来の意味として解釈できることから定形的な表現として項目立てした。［進んでいく先　進んでいく方向］（４４）はこれまで来た道の「来し方」と、これから進んでいく道の「行く末」を対比し並べている。残る２０例は「末」の③の意味で解釈できるが、単なる「末」の場合は「心の末」「恨みの末」など、形を持たざるものが将来どのように変化するのか、ということに着目されていた。それに対し、「行く末」は自分や他者の身の行き着く先、将来を語る例が多い。（４６）は発病した父が作者の懐妊を知り、泰山府君の祭り等の延命供養を施す様に対しての作者の心情である。自身

の懐妊の結果、つまり作者の将来を指している。（４８）は念仏によって安泰となった自身の将来を指しての例である。また（５８）の齢の祝いの歌の例は、これからも長く続く身の将来を意味する例である。「身」といった形あるものに使用されることが多いのが特徴である。「行く」という語が付属することにより、対象が積極的に動き、自ら変わっていくものという意味が強化されていると言えよう。

５　『蜻蛉日記』における「末」

前節の『とはずがたり』同様に、『蜻蛉日記』の「すゑ（末）」６例も意味・用法別に分類し、記述する。その際『とはずがたり』との違いを参照しやすいように、分類の番号は便宜上、前節と同様のものを使用した。つまり、ここで使用されない番号の意味・用法は『蜻蛉日記』には見られないことを示す。また、『蜻蛉日記』のみに表れる意味・用法については『とはずがたり』の場合の意味・用法分類番号の最後である⑦に続く番号を付し、黒塗りで示した。

すゑ〈末　名詞〉

①［(物の）末端　端］　２例で、全体の 33.3%を占める。

（６５）山の**末**と思ふやうなる人のために、はるかにあるに、ことなるにも、身の憂きことはまづおぼえけり。（Ⅱ238.14.121）

（６６）　　千代も経よたちかへりつつ山城のこまにくらべしうりの**すゑ**なり（Ⅳ375.14.023）

（６５）は兼家の贈り物に対しての作者の思案である。「山の末と思ふやうなる人」とは作者自身のことを指し、自分は山の奥に入ることを思う人、つまり出家を思う身の上であることを指す。（６６）は巻末歌集内の和歌の用例である。銀の瓜破子に書き付ける歌として冷泉院に贈ったもので、世代を重ねてきた瓜の末のように、千代を重ねてほしいと願う歌である。瓜の「末」とは、弦の先端の方に身をつけた瓜を指し、実の生る時期が遅く、弦の先の方になった瓜である。

③［将来　未来］１例のみで全体の 16.6%である。

（６７）　　かけて見し**末**も絶えにし日蔭草何によそへて今日結ぶらむ（Ⅳ372.15.015）

巻末歌集内の和歌の例で、為雅の女の元へ入道殿が通わなくなり、女の代わりに詠んだ歌である。かつては長く続くはずだった二人の将来が絶えてしまったという心情を詠む。過去に思っていた「末」は、具体的な地点が想定されていない漠然とした未来である。⑥の［結果　結末］と二人の恋愛関係の結果と見るよりも、③で見た方が適当であろう。

④［(季節や月の）終りごろ　末期］２例で全体の 33.3%である。

（６８）　　・・・あはれいまはかくいふかひもなけれども思ひしことは春の**末**花なむ

散ると騒ぎしを・・・(Ⅱ178.14.068)
（６９）　　なびくかな思はぬかたに呉竹のうき世の**すゑ**はかくこそありけれ（Ⅱ220.06.071)
『とはずがたり』同様に、特定の時間や期間を示す語に続く形で使用される。(６９)は「うき世」の中でも末期の、積り重なった悲しみで嘆きの深い期間を指している。

❽［(和歌の）下の句］
これは短歌の上の句に対して、終わりの七・七の二句である下の句を示す「末」の例である。１例のみみられ、全体の 16.6%である。なお、この意味・用法は『とはずがたり』には見られない。
（７０）いまひとたびせむとて、なからまではあそばしたなるを、『**末**なむまだしき』とのたまふなる」(Ⅲ355.14.158)
兼道に返歌を送った後の、女房の言葉で、兼道が作者の歌に対してもう一度歌を返そうと試みたことが語られる。しかし下の句がうまくできないと、その断念を語るのである。

『蜻蛉日記』における「末」を含む複合語「ゆくすゑ」のみである。
○ゆくすゑ
［進んでいく先　進んでいく方向］１例
（７１）Ⅰ097.08.046　　君をのみ頼むたびなる心には**ゆくすゑ**遠く思ほゆるかな
［これから先　将来　前途］６例　(掛詞重複分１例含む)
（７１）　君をのみ頼むたびなる心には**ゆくすゑ**遠く思ほゆるかな（Ⅰ097.08.046)
（７２）　われをのみ頼むといへば**ゆくすゑ**の松の契りも来てこそは見め（Ⅰ098.04.089)
（７３）　曇り夜の月とわが身の**ゆくすゑ**のおぼつかなさはいづれまされり（Ⅰ129.04.020)
（７４）　大空をめぐる月日のいくかへり今日**ゆくすゑ**あはむとすらむ(Ⅱ184.10.013)
（７５）行基菩薩は、**ゆくすゑ**の人のためにこそ、(Ⅱ219.15.031)
（７６）ただいまのごとくにては、**ゆくすゑ**さへ心細きに、(Ⅲ279.04.005)
（７１）は陸奥守として赴任する父が兼家に読まれることを想定し詠んだ歌で、自身のこれからの旅路と娘の将来の意味の「ゆくすゑ」で、掛詞であると考えられる。それに対し（７２）はその将来を帰京の暁に見て確認せよ、と返す。『とはずがたり』同様に、(７３）の「身のゆくすゑ」や（７５）の「ゆくすゑの人」の例のように、能動的に動き変化するものに対する将来の意味の例が多く見られる。

６　まとめ

前節までにおこなった「末」の分類を以下の表でまとめる。その際に、地の文、和歌、発言・手紙に分類し、それぞれの用例数を示した。なお、和歌の分類には引き歌の例は含んでおらず、引き歌は地の文に見られる場合は地の文、発言・手紙の中に見られる場合は発言・手紙の中に含めた。また、表に複合語は含んでいない。

	『とはずがたり』				『蜻蛉日記』			
	地の文	和歌	発言・手紙	計	地の文	和歌	発言・手紙	計
①(物の)先端　端	4	2	5	11	1	1		2
②子孫　跡継ぎ	1	1		2				
③将来　未来	1	1	2	4		1		1
④(季節や月)の終わりごろ　末期	11			11		2		2
⑤晩年　盛りを過ぎた時期　衰退期			1	1				
⑥結果　結末	2	1	1	4				
⑦末席　下位　下座		1		1				
⑧(和歌の)下の句							1	1
合計	19	6	9	34	1	4	1	6

二つを比較すると、『とはずがたり』における「末」の意味・用法の種類が多いことが明らかになる。基本的な意味は物体の端を指す①であるが、対象の範囲が空間、時間と、次第に拡大されていった。更に時間的な用法の中でも、時間の「末」ということから到達地点、末期という期間の指定からマイナスの意味も含む衰退期、と新たな意味の要素が付加されていった。時代とともに意味・用法が分化していく様を、両者の結果から見ることができるだろう。『とはずがたり』における「末」は地の文での例が半数以上を占めているが、和歌や発言・手紙の中での使用が極端に少ないわけではない。④のみ全て地の文に現れているが、その他は地の文、和歌、発言・手紙に偏りがあるとは言えないだろう。④は時期を「正月の末」など、時期を特定する使用例であるため、地の文に多く現れるのは自然なことに思われる。

しかし、『蜻蛉日記』の場合は数が少ないとは言え、和歌の例が半数以上である。④もどちらも和歌の例であるのは興味深い。宮中での生活と諸国の旅の記録による回想録として構成される『とはずがたり』と、優れた歌詠みとして評価された作者が、夫を中心とした人間関係の様を、その中で詠まれた歌をとり集め構成した『蜻蛉日記』の性格としての違いがここにも見ることができるのだろうか。このような意味・用法分類を蓄積させることにより、作品や作者、日記構成の方法の問題にも踏み込むことができるだろう。

【注】

１、『とはずがたり』の数値は高梨信博（2002 年）『とはずがたり語彙表』（早稲田大学文学部高梨信博研究室）から算出。『蜻蛉日記』は宮島達夫、鈴木泰 、石井久雄、安部清哉（2014 年）『日本古典対照分類語彙表』（笠間書院）参照。

２、以下、頭注を示す場合は、久保田淳校注・訳（1999 年）『新編日本古典文学全集４７　建礼門院右京大夫　とはずがたり』（小学館）の頭注の該当頁と頭注番号を示した。

３片野達郎、松野陽一（1993 年）『新日本古典文学大系１０　千載和歌集』（岩波書店）

４阿部秋生、秋山虔、今井源衛、鈴木日出男校注・訳（1995 年）『新編日本古典文学全集２１　源氏物語②』（小学館）

【参考文献】

入江さやか（2013）「『とはずがたり』における「言ふ」の意味・用法」『同志社国文学』第 78 号

入江さやか（2014）「『とはずがたり』における「申す」の意味・用法」『同志社国文学』第 81 号

石井久雄（2015）「『とはずがたり』全用語全事例辞典　寄稿」『同志社日本語研究』第 18 号

牧野さやか（2015）「『とはずがたり』における「かみ（上）」「うへ（上）の意味・用法」『同志社日本語研究』第 18 号

入江さやか（2015）「『とはずがたり』における「聞こゆ」の意味・用法―「言ふ」「聞こゆ」「申す」「奏す」―」『同志社日本語研究』第 18 号

丸山健一郎（2015）「『とはずがたり』における「気色」の意味の定量」『同志社日本語研究』第 18 号

石田裕子（2015）「『とはずがたり』における動詞「とる」の意味・用法」『同志社日本語研究』第 18 号

入江さやか（2016）「『とはずがたり』における「思ひ」の意味・用法―『蜻蛉日記』と比較して―」『同志社国文学』第 84 号

【付記】

本稿は、科学研究費補助金による 2010～12 年度基盤研究（C）「とはずがたり全用語全事例辞典の作成にかかる基礎的研究」（研究代表者石井久雄、研究課題番号 JSPS　22520478）、及び、2013～15 年度基盤研究（C）「蜻蛉日記全用語全事例辞典の作成にかかる基礎的研究」（研究代表者石井久雄、研究課題番号 JSPS　25370531）の成果の一部である。